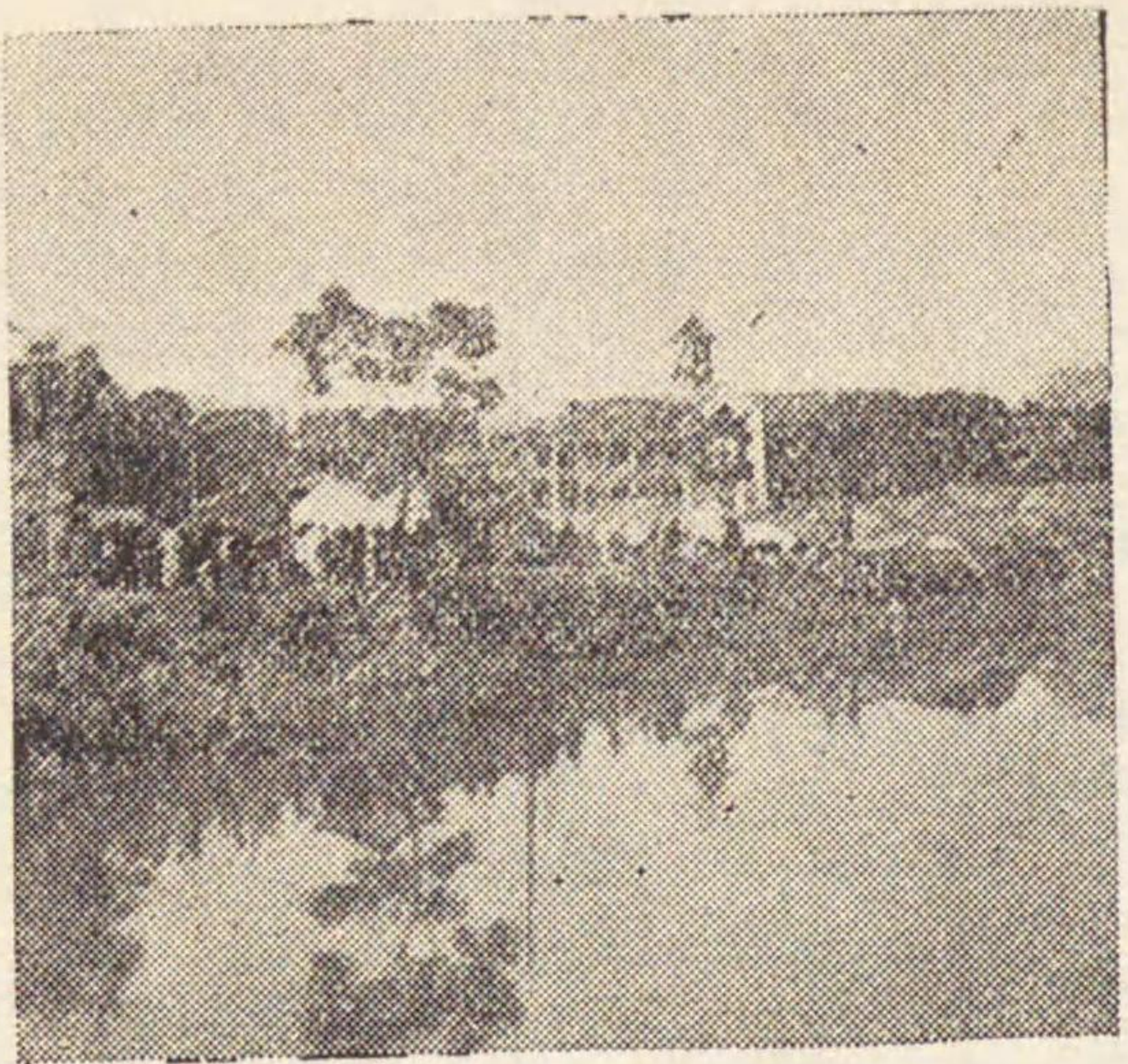


イ、と云つたのが、私達には象徴的に響きました。全く、戦後に於ける建設の事業の困難であること、道は遠きことが、しみじみと考へられたのです。

七、普濟醫院

我々は五千人も避難民が入つて居るといふ獨逸人の病院に行つてみることにしました。東莞の外國權益としては、その普濟醫院と、佛蘭西人天主堂、獨逸人教會、米國人油屋、等があるさうです。全く人影のない城外の商店街を抜け、狭い石登の町を通り、やがて郊外に出ました。郊外に出るすぐ前のクリークの橋梁に、大村軍曹の分隊が衛兵に出てゐました。歩哨に立つてゐたのは吉光上等兵でした。私達は奇遇に喜び、手を握り合つて無事を祝しました。勤務交替は五時といふので、私達は今夜更めて兵營で會ふことを約して別れました。私は何時でも、暫く會はずにゐた兵隊が、會ふ度毎に變つてゐるのに胸を衝たれます。それは私達が初陣直後のごとく、顯著では無かつたけれども、我々兵隊が重なる戦闘の度毎にその鍛練の度を加へられるといふこと

は、實に當然のことながら、駭くべく、且つそれは常に我々の胸を衝たすには置かぬものなのです。それはまた、自分もまだ生きてゐるが、彼等もまだ生きて居つたか、といふ譬へやうもない喜びでもあるのです。郊外に出ると、クリークに挟まれた狭い石登の道に、次第にうろろして



居る支那人の影が増え、前方に、ハーゲンクロイツの大旗を張つた白聖の尖塔と、病院と、駭くべく混雑し溢れ立ち騒いでゐる無数の支那人の群とが見えて來ました。

私達が行くと、支那人達は道を避け、私達を見ましたが、それは充分に好意ある眸とは云へず、寧ろ敵意ある表情と感じられました。何れもぼろぼろの衣類に、跣足が多く、垢と泥とに汚れ、ここにも又、多数の不具者と癩者とが居ました。私達はこの病院の邸内から湧き起る喧騒の聲に駭いてしまつたのです。竹矢來を廻らした中に、藁で作つた堀立小屋が無数にあり、そこに居る無数の支那人がわんわんと蜂のやうに聲を立てつづけ、右往左往して居る。異様な臭氣が鼻をつく。

急造の竈や鍋や食器等が散亂し、果物店や、屋臺を出して粥を賣つてゐる露店なども出來てゐる。女や子供が何かしきりに喚いてゐる。さながらここに突然にひとつの町が出現したごとくであります。このドノゴオ・トンカの間を私達が抜けて行くと、一齊に私達に彼等の眼が注がれました。私はこれらの眺めの中に支那といふものの避け難い悲劇の面貌を、ふと見たやうな感慨にとらはれ、一層我々の事業の困難さが身に沁みたのです。私の横に居た張通譯が、まるで關東大震災の時の通りです、と云ひました。

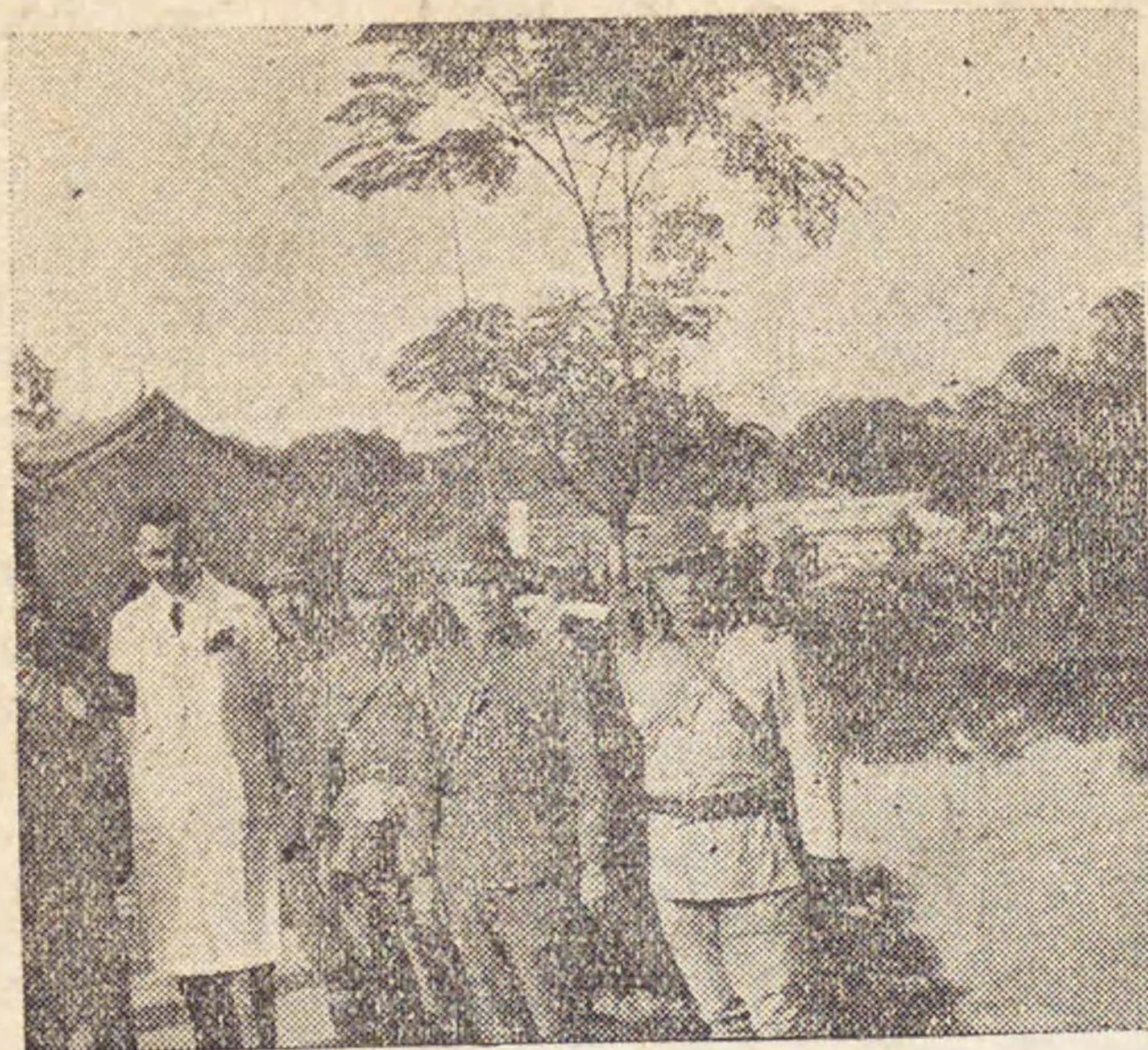
カント・オゴノド



やがて、獨逸婦人の背高き看護婦に伴はれて、白衣の院長オットー・フック氏がやつて來ました。荒川部隊長や中西中尉は舊知らしく、院長は溢れるばかりの笑みを湛へ、握手を求め、我々

を歓迎しました。我々の會見をドノゴオ・トンカの住民達は、不安と猜疑の表情を漲らして、凝視して居ます。私達は院長の邸宅へ案内され、鎧戸を下した暗いバルコニーで、圓卓を圍みました。私達の席へ牧師ウイヘルム・グランドマン氏が加はりました。改めて私達は名刺を貰ひましたが、獨逸語の署名の裏には、「德國禮賢會牧師・東莞稍潭痲瘋院院長・官達民・德國人」とあります。我々にはこの獨逸人は心から我々を歓迎してゐるやうに見受けられました。この時、私は、今更荒川部隊長の流暢な獨逸語に駭いたものです。失禮なことには、私は今まで全く荒川部隊長がこんなにも獨逸語が出來るといふことを知らなかつたのです。我々の話はそれ故に荒川部隊長の獨逸語と、中西中尉の英語とで遲滯なく運ばれたのです。野原大尉の意見を初めとして、さまざまの話題が兩者の間に取り交はされました。我々が、避難民を世話してゐることの勞を謝すると、我々は神の名に依つてこれを行つてゐるのだと云ひ、日本軍はよい時期に作戰を行つた、今の時期を除いては、廣東は暑すぎ、或は雨期にはじとじと濕氣に惱まされ、戰爭に適當でない、日本軍は立派だ、と云ひました。オットー・フック氏とグランドマン氏は我々の質問に隨つて色々答へ、又、彼等の希望などを述べました。——現在、避難してゐる支那人は一萬人を

超えて居る。我々も早く歸したく思つてゐる。何よりも火災が怖い。病院からは給與はしてゐない。そこまでは力が及ばない。彼等は自分で持ち込んで来たのだが、既に米も残り少なくなつたらしい。女子供は非常に日本軍を恐れてゐる。主として支那軍の宣傳の結果である。廣東に於ける宣撫工作の最大眼目は女と金である。廣東人は甚だ自尊心が強い。一度怒らすと後はどうにも扱ひ難い。殊に女と金とに就て注意を怠らざる時は、廣東人を推服せしめることはさして難事ではない。この點に安心さへ行けば、ここに集つて居る支那人も直ちに解散し、東莞市の復活を早めるであらう。(女に不安があれば男だけでも先に歸したらどうか、といふ我々の間に對し、それは煮炊きが出来ないから困難だらう、と云ひ、私達は哄笑しました)風土病としてはさして特種なものはない。癩病、それからマラリヤが最も多い。今後は我々も協力するから、常駐軍隊に依つて治安の恢復を計りたい。次に、先般、薬品を買ひに香港に遣はしたものが廣東までは船で歸つてゐるが、爾後不明である。獨逸領事館と連絡をとり、歸還出来るやうに御手配を願ひたい。それから戦後、我々は全く通信の方法を絶たれて居る。私信故、二週間に一回の通信の許可が欲しい。新聞も長い間見ない。その點も同情ありたい。——そのやうな話が主たるものでした。



普濟醫院

我々としても意のあるところを傳へ、兩氏は満足した模様でした。院長は我々にランチを御馳走しようと云ひ、やがて食卓の用意がされました。我々は既に食事をすまして来てはゐたのですが、その好意を受けたのです。小柄な院長夫人は如才なく私達を應接してくれ、實に和やかな會合でした。私達が、コンドル機が四十六時間を以て伯林東京間を飛んだことを告げますと、グルンドマン氏は非常に喜び、あれは伯林紐育間を二十時間で飛んだ飛行機ですよ、と得意満面としてこたへました。IM WESTERN NIGHT NEWSの話を持ち出すと、あれは駄目です、いけません、と、宛も穢はしいものを聞くやうに眉を寄せました。ルマルク氏はさつぱり人氣がないうやうです。フック氏は歐洲大戦の當時には軍醫として参戦し、大戦の終りには野戦病院長として

長いこと西部戦線に居つたといふことです。デザートに私達はここでもしこたまバナナを御馳走になり、表に出ました。

異様な臭気と、喧騒と、敵意に満ちた無数の眸の間を通つて、私達は病院の内部の見學をしました。私達の眼にはそれらの眺めは、ただ汚穢と醜悪と腐敗との埒塙のごとく見えましたが、私は、それらのただ中を、堅確な足どりで、私達の先頭に立ち、始終微笑を湛へながら歩いて行くオートー・フック氏を驚歎する思ひで眺めずには居られませんでした。この汚濁のただ中であつて、こんなにもたのしげな足どりと、こんなにも満ち足りた表情とを私は嘗て知りません。私は肝心の病人の様子や、示される醫療設備や、手術室や、薬品棚やに眼を止めるよりも、この駭くべき院長の姿をしみじみと眺めてゐたものです。醫者が病人の間にあることは當然であつて、その當然なことが、彼をこんなにもたのしげに見せるのでせうか。無論それもあるでせう。然しながら、私は、此の何気ない醫師の態度の中に、重大な教訓があることをはつきりと感じたのです。これこそが重要なことであり、これこそが根本的なことである。オートー・フック氏は既に十七年間の病院に居ると云ふ。我々は生命を賭した戦を無駄に終らしむるべきではない。我

我はその建設を意圖する。その時に我々の方法に就ては深く反省するところがなくてはならぬ。我々は體系を作り綱要を決するとともに、もつと根本的なもの、非常に詰らなく見えるものに没頭する必要はないか。誠實なる眼立たない仕事がかの功名心を加へられることなくして、多くなされねばならない。そのやうな事がほんとうに我々の建設を成就する眞の力である。そのやうな感慨と決心とが、オートー・フック氏のたのしげな白衣の姿を見てゐるうちに、私の胸に湧いて來たのです。

多くの病人の間を抜け、私達は支那兵の收容されてゐる一室に導かれました。東莞の戦闘で日本軍の彈丸に傷けられた敵軍の兵士達が、三十人ばかり寢臺の上に寝てゐました。東莞攻撃を指揮した荒川部隊長が先頭に行くと、傷いた支那の兵隊は、極めて不可解なものを見るやうに我々に瞳を投げました。無論我々はこの病院内で投げられた多くの眸のうち、最も敵意ある眼を期待したのです。然しながら、支那の兵士達が我々に見せた表情は、そのやうに憎惡に満ちたものではなかつたのです。或る兵隊は我々に向つて微笑さへ見せました。それは我々には諒解し難いものと思はれたのです。同時に、何かわかつたやうな氣持もしたのです。我々は煙草を兵隊に與へ

ました。銃火を以て殺戮に見えた敵國の兵隊同志が、かかる場合に及べば、憎惡の感情のみを以て對しないといふことは、我々をひとつの高い希望に結びつけます。數棟の病室のうち、肺疾と癩病室とは我々は敬遠しました。無論我々は病氣の見學が主ではなく、我々が普濟醫院を訪問した趣旨と教訓とは既に充分汲み取れたからです。我々は好意を謝して退出しました。又も敬意に満ちた無数の眼が我々に注がれました。石登を抜けながら、私は、雑踏と喧騒の中に、ぼかんと立つて我々を見送つてゐる小さな子供達が眼にとまり、ふと、刺すやうな郷愁があつたのです。

八、月 と 鷄

ぐるぐると道を迷つた揚句に、私と中西中尉とはやつと原隊の居る中學校を探し當てました。既に傾きかけてゐた太陽は、私達が衛門を潜る頃には暗くなつてゐました。兵舎から兵隊が次々に飛び出して来て、やあやあといふ挨拶を私は機關銃のやうに浴せかけられました。やあやあと

私も答へ、泣きべその私はもう胸がいつぱいになつて來たのです。髭だらけの戦友の顔を次々に私は眺め廻し、お互に無事でよかつたと云ひました。部隊長の部屋に入つて行くと、木原部隊長は恰度食事をして居ました。私はその無事を祝し、御奮戦を謝します、と云ひました。いや、ありがたう、部隊はだいぶ苦戦をした、わしも危いところだつたと云ひ、木原部隊長は私に鐵兜を示しました。縁から五分と離れてゐない所に彈丸の跡が深くあき、鐵兜は彈丸のために一間餘も彈ね飛ばされたといふことです。私は立つて部屋の一隅にある遺骨に敬禮をし、涙が出て來て止りませんでした。白井中尉、重田上等兵、其他幾つかの位牌があり、私の眼の前を、既に小さな箱の中の人と化した兵隊達のありし日の面影がちらついて去らないのです。今村准尉、内田軍曹、中本軍曹を初め多くの戦傷者も既に此處に居ないといふのです。私は部隊長の部屋を出て、廊下を隔ててすぐ斜にある片山中尉の部屋に入りました。片山中尉は立ち上り、よく來たな、と云ひました。苦勞したさうだな、と私は云ひ彼の手をしつかりと握りました。彼はすさまじい鼻背を蓄へてゐましたが、今度はだいぶん兵隊を傷めた、と呟くやうに云ひ、俺もすんでの所で、お前にも會へないところだつたよ、と述懐しました。東莞に來る自動車の中で中西中尉が話した戦闘

の折のことを、彼はいかにも話すのが辛いといふ口調で、ぼつりぼつりと話しました。

お前が来る時に壊れた石の橋があつたらう。あの東江南水道を暗い中に渡河して對岸の丘陵に嚙りついた。闇の中から敵はどんどん機關銃を射つて来た。然し幸ひ丘陵の蔭になつてその時は損害はなかつた。俺の居た其の丘陵は俺の部隊だけで、そこを持つてゐないと味方の前進がどうしても出来ない。敵の兵力はよく判らないが、相當の數と思はれる。その中に敵は盲滅法に迫撃砲を射つて来た。敵はよく判らない。ただ何としても俺達はここを死守してゐなければならぬ。その中に夜が明けて来た。敵が稜線を越えて出て来ようとする奴を此方から射撃して封じて居た。左右との連絡がよく判らない。俺は兵隊を一人連れて、今まで伏せてゐた所を離れて、右手の岩角を曲つた。すると突然、俺が先刻まで居たと思はれる附近で、すさまじい爆音がした。俺の居たところからは見えなかつた。俺はおかしいと思ひ、引き返してみると駭いた。俺はぎよつとして、眼がくらくらとしたほどだ。俺が今まで居た所は、ひよつと見た眼にまつ赤になつてゐたのだ。俺は全部やられたと思ひ、駭いて駈けつけた。俺はその時の氣持をどう云つてよいか、説明の仕様がな。迫撃砲弾は岩角に當つたらしい。砲弾は岩石と一緒に炸裂したのだ。全

部やられたと思つたが、その中に九人が一緒にやられ、一人は即死して居ることが判つた。後の數人も重傷だ。幸ひ、我々の後から来てゐた工兵の兵隊が、ありたけの治療具や繃帯を出して、手當を手傳つてくれた。俺は自分が下る譯に行かず、擔架で次々に運ばれる兵隊を見てゐたが、無暗に腹が立つて来た。支那兵の奴、兵隊の仇を取つてやるぞ、と俺は口に出して云つたさうだ。俺は氣が注かなかつたが、兵隊の話では、俺が敵陣を睨みながら、血走つた眼をし、ひよつと、さう云つたさうだ。正午過ぎた頃、漸く左右との連絡が取れ、攻撃が始まつた。俺は刀を振つて飛び出した。彈丸の音が蚊のやうに聞えた。俺は今までの戦闘では一番勇敢であつたかも知れん。敵陣地を取つた時には、それまで出なかつた涙がぼろぼろと出たよ。

私は彼の氣持が判り、この部下から敬愛されて居た隊長の肩に手をおいたのです。すると、私達が話をして居る間に、點呼の喇叭が鳴り始めました。庭の上に多くの足音がざはめき始め、兵隊達のがやがやと騒ぐ聲が聞え、やがて號令の聲と共に、急にしんと静まり返りました。片山中尉も降りて行きました。やがて、番號を掛ける威勢のよい聲が聞え始めましたが、突然、私はどきんとして胸を突かれる思ひがしたのです。それはもつと續かなければならぬ筈の番號が、ぼつ

んと切れてしまった感じを受けたからです。私は二階の窓から庭を見下しました。雲のない空には皎々たる月が冴え、庭内は明るく、整然と並んだ兵隊の姿がはつきりと見られました。私は少なくなつた兵隊の列を眺めて居る中に、その悲しみとは全然別に、何かこみ上げて来る喜びのごときものに駭いたのです。私にはどうにもそれが最初は説明が付きませんでした。それは、こんなにも苦難の中にあり、數次の戦闘に犠牲を出しながら、その軍隊の姿が弱々しくは見え、その中になほも漲る勇氣のごときものが溢れ漲つてゐるといふことだつたのでせうか。私は閑散になつた兵隊の列を月光の中に眺め、日本の兵隊の強さといふものが、何となしに思ひみられてな
らなかつたのです。

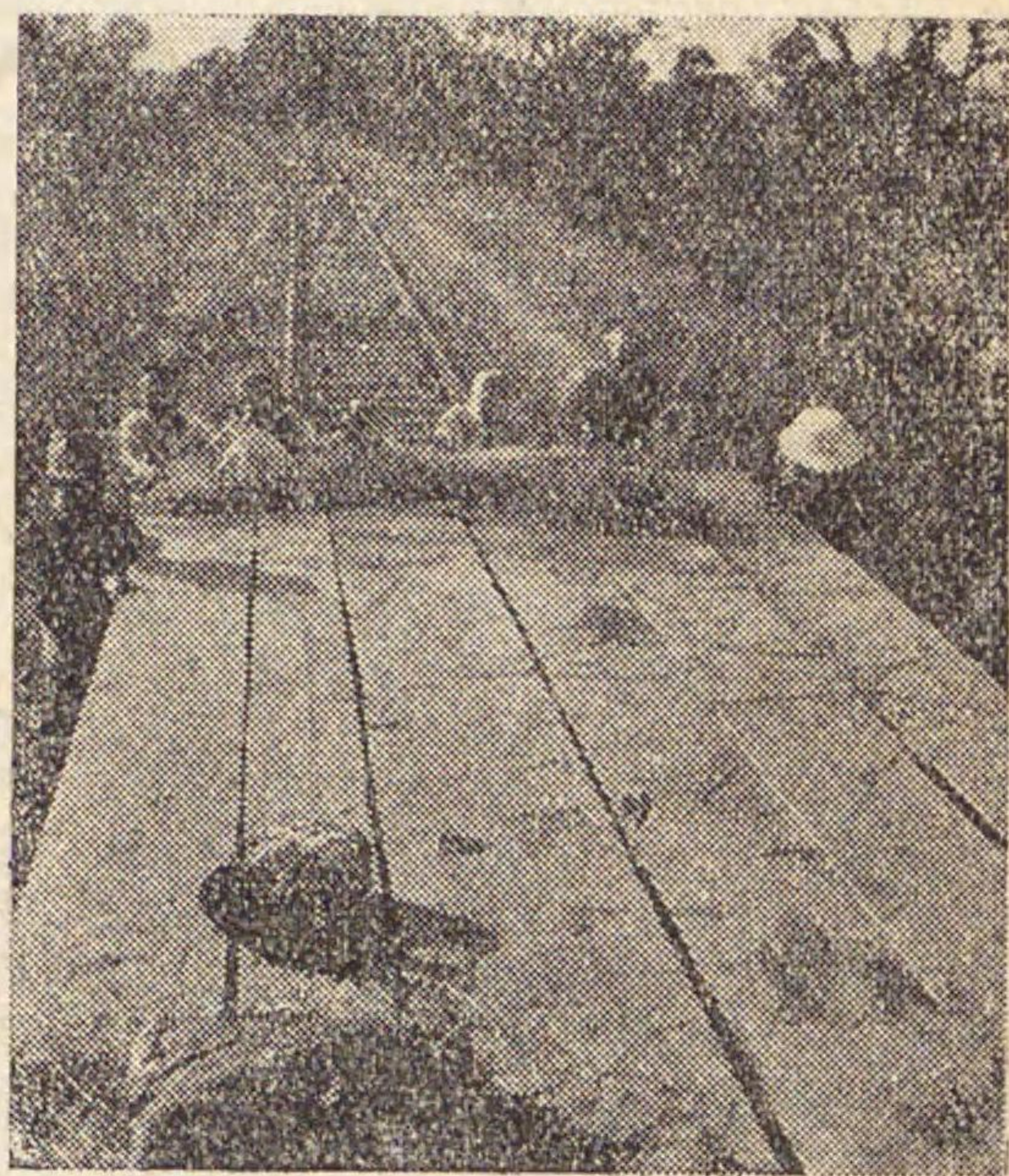
點呼が終つて兵隊が解散すると、階段をどやどやと上つて来る足音が聞え、扉を開いて、榊添軍曹が顔を出しました。鶏の仕度が出来てゐるから早く来いと云ふのです。榊添軍曹は嘗て私が隊長であつた私の兵隊の現在の隊長をして居る男です。私は彼と一緒に階段を降り、月光の庭に出て、兵隊たちの部屋に導かれました。私のために駭くべき珍味が用意されてありました。大きな皿に山のごとく料理された鶏と、刺身と酒とがあり、かんかに熾つた七輪には鍋が掛け

られてぐつぐつと、よい匂ひを立てて煮えてゐました。よい匂ひ、などといかにもいやしんぼのやうなるも、私は廣東に来て以來、鶏などは夢にさへ見たこともなく、増して口にしたことは一度も無かつたのです。私がそれを云ふと、東莞はバナナと鶏はいくらでもあると云つて、兵隊は笑ひ、大いに私に同情しました。七輪の周圍には、榊添軍曹、大村軍曹、枝松軍曹、等の隊長を初め、兵隊達が集まりました。中本軍曹は兩大腿部を貫通され、野戦病院に居るとのことです。幸ひにも私の兵隊には怪我人は無く、早瀬一等兵が病氣のため入院して居るのみにて、後は無事だつたやうです。但し、阪上伍長は虎門塞の方に糧秣搬送警備に出てゐるし、戸成上等兵や甲斐上等兵、白橋上等兵等も、先刻まで居たのに、夕刻から附近の衛兵に出たといふことです。吉田上等兵、古城上等兵、湊上等兵の三名だけが居ました。皆上等兵になつて居ます。久しぶりに會ひたくて来たのに居ないことは大變残念でしたが、先づ、無事だといふことで私もほつとした思ひでした。私達の會食は實に賑やかに進行しました。私が久し振りに持つことの出来た楽しい團欒です。ああ、兵隊はいいな、と私はつくづくとうなづきました。その夜の話題の數々はまた語るべき價値がありませう。或ひはまた、くだらないよい話ばかりであつた、といふ一語にも

盡きませう。私はすつかり酩酊し、たうとう十二時過ぎたのも知らず、二時頃までも話し込んでしまいました。私は火照つた頬を冷すために庭に出ました。私は痛いほど浴びた月光の中で、馬鹿馬鹿しいことには、鶏のやうに、コケコオコオ、と鳴いてみたくなつたのです。

九、再び、トロッコと兵隊

午前九時に私達は出發しました。荒川部隊長に別れを告げ、私達は自動車で東莞城を後にしました。歸りには私の荷物は俄然増えました。それは兵隊達が山のごとく集めて来た手紙の束と、三羽の鶏とです。手紙は少しでも早く着くために、廣東から出してやらうといふ譯です。三羽の鶏は、私が廣東には鶏などは夢に見た事が無いと云つたので、兵隊がお土産にくれたものです。



丘陵に挟まれた稻田の道を行つてゐる中に、塔のある高地が見えて來ましたが、私は顔を反けた思ひでした。やがて私達は鐵橋の落ちてゐる川の所に出て、民船で渡り、再び石龍から、トロッコ上の人となつたのであります。然し、今度のトロッコは貨車の箱を外したやうな大きなもので、支那人が十人ばかりで押し、私達は來た時のやうに自分では機關になる必要は無かつたのであります。我々は今度はひろびろとしたトロッコの上で、十二月の太陽を浴びながら、居眠りをすることすら出來たのです。野原太尉は、今度の視察は非常に勉強になつたと云ひ、今夜は東莞の鶏で久し振りのすき焼をしよう、と笑ひました。やがて晝近く石灘の町が見え始め、落ちた鐵道の架橋工事をしてゐる兵隊と、その鐵橋の向ふに、黒々と煙を吐いて居る懐しい汽車の雄姿とが見えて來ました。

(あまり御無沙汰をしてゐるので、東莞に行つた折のことなど認めてみましたが、甚だ舊聞で申譯ない次第です。現在では當時とは又大いに状況が異つて居ることです。現在では石龍まで汽車が通じて居りますし、東莞にも其の後立派な治安維持會が出來、普濟醫院に避難して居た

支那人も殆ど町に歸つて、復興顯著なるものがあると云ひます。石龍も石灘も亦大いに面目を一新して居ることです。當時は鶏などは影も形もなかつた廣東でも、今ではそんなに不自由なく食へることが出来ます。ただ、この古ぼけた紀行文（やたらに感傷をふりまはした遊療法の診斷書）も、また、ひとつの歴史的な風景を叙したものだといふことで、御勘辨を願へるでせうか。廣東にて。正月十二日（）



昭和十四年五月十二日印刷
 昭和十四年五月十五日發行
 海南島記
 定價八拾錢
 著者 火野葦平
 發行者 山本三生
 印刷者 村尾一雄
 東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
 東京市芝區新橋七ノ一二
 發兌 改造社
 振替東京八四〇二番
 電話芝(43)一一二一四番

(長谷部製本)

文部省推薦圖書

火野葦平著

麥と兵隊

現地寫真數十葉 定價一圓 送料九錢

徐州へ徐州へ、一望千里の麥畑を兵隊
たちは怒濤と進む民族精神の行進曲

現地寫真廿數葉挿入 定價六十錢 送料六錢

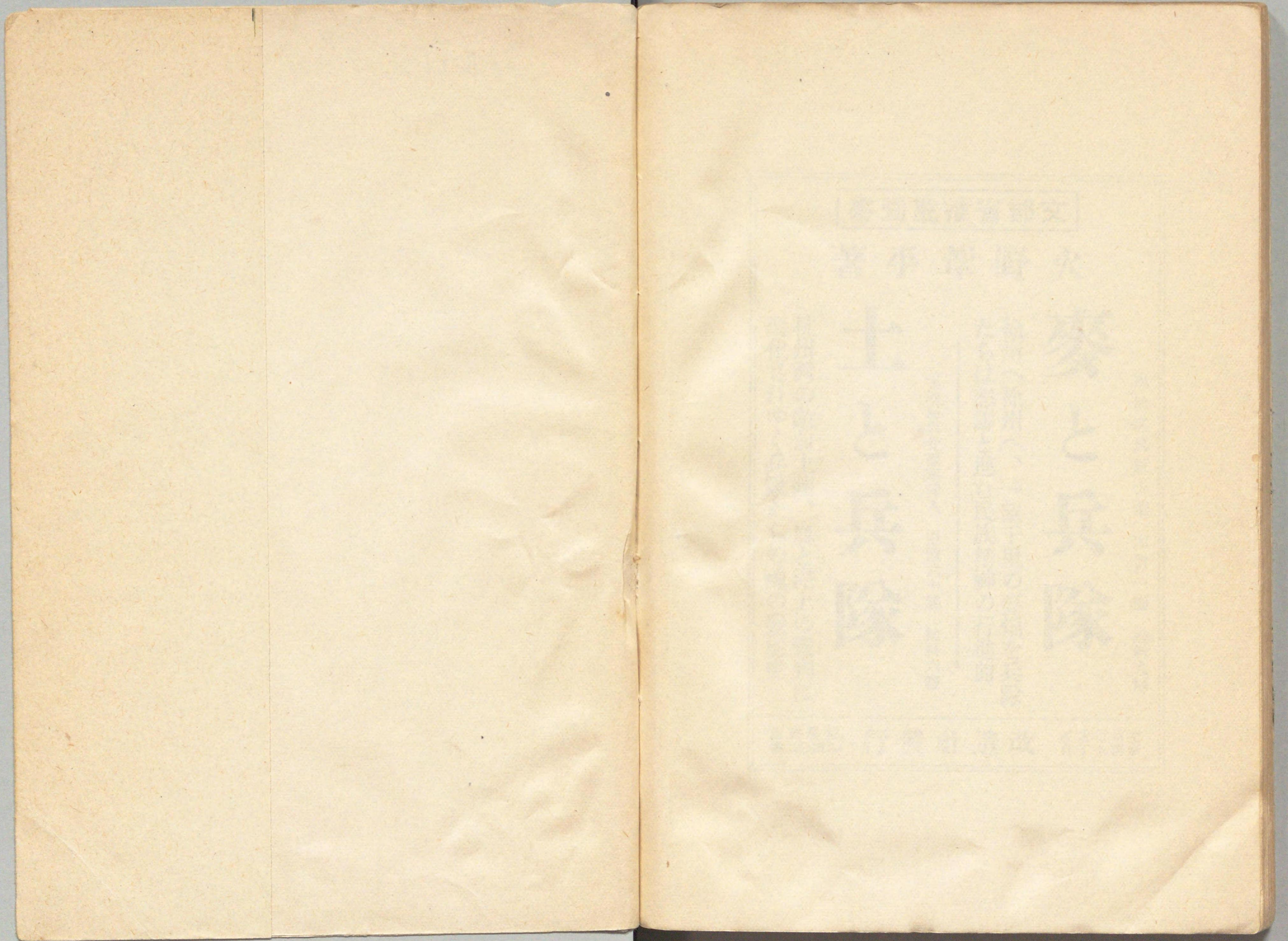
土と兵隊

杭州灣の敵前上陸、血と泥土の戦列に
聖化されゆく兵隊たちの魂の發展史

東京市芝橋區

改造社發行

振替東京番
八四〇二番



文
不
士
參
兵
除
隊

2111

